

カラ受身文の用法に関する一考察

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊井, 浩子 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.14945/00024867 |

カラ受身文の用法に関する一考察

熊井浩子

【要旨】

本稿では、「中納言」等で収集した用例を中心に、動作主をカラで標示する有情の受身に用いられる動詞やその用法を考察した。その結果、従来はカラを用いないとされていた動詞でも、働きかけやエネルギー、感情・感覚の移動など、何らかの意味で動作主が起点と解釈される場合には広くカラが用いられる場合があることが明らかになった。このようなカラ格が用いられやすい動詞の意味特徴等による選択に加え、同じ動詞であっても、社会通念とは異なる動作主である場合など、何らかの意味で出所や方向性、働きかけの勢いや強さを強調する必要がある場合などにカラが用いられる傾向があることもわかった。

【キーワード】受身 ニ格 カラ格 起点

1. はじめに

受身文の動作主はニ格で表される場合が多いが、カラ格やニヨッテ、デなどで標示される場合もある。カラ格でマークされる受身文の特徴に関する代表的な考察は細川（1986）や張（1995）である。これらの論考については近年、認知言語学やコーパス研究などの新たな観点から考察が加えられている。

本稿では、カラ受身文に関する主な先行研究を概観したうえで、ニ格も可能である際に、話し手や書き手がなぜカラ格を用いるのか、カラ格を用いることでどのような意味上の違いが生ずるのかという観点から分析を行なう。

その際、国立国語研究所が公開しているコーパス検索アプリケーション「中納言」の「現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版」（以下、「書き」）、「日本語話し言葉コーパス」（以下、「話し」）及び「名大会話コーパス」（以下、「名大」）の3種類のコーパスを用いた用例を中心とし、適宜gooやYahooの検索エンジンで収集した例も併せて分析する。なお、本稿では、事態を人と人との関係の中で捉えることが受身の基本的な用法であるという立場から、主体及び動作主ともに人または人に類する名詞である場合、即ち、有情・有情受身文（以下、AA受身文）に限定して論を進める。また、直接受身が考察の中心となり、持ち主の受身や迷惑受身については触れないこととする。

2. 先行研究の概観

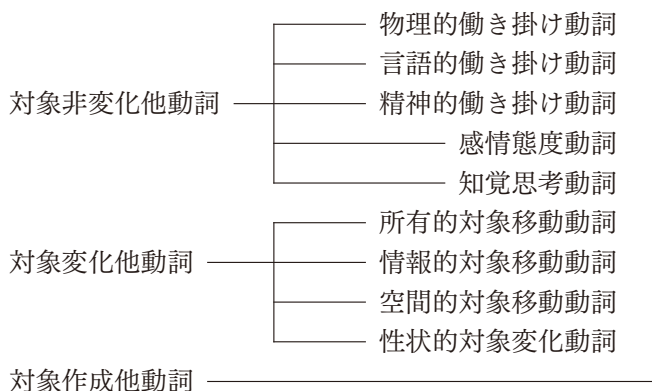
受身文の動作主標示に関する代表的な論考として、ニ格・ニヨッテ及びカラ格の違いを論じた細川（1986）が挙げられる。そこでは、受身文は動詞の意味により「動作受身」と「状態受身」に分けられているが、この「状態受身」には、「殺す」「壊す」のように、動作に伴って結果を強く含意する動詞を述語とする場合も含まれている点が特徴である。この、

「動作受身」にはニ格とカラ格が用いられ、「状態受身」にはニヨツテが用いられ、ニ格とカラ格は用いられないか、用いられにくくなると細川は主張する。そして、動作に力点を置く受動文において、ニ格は直接的な関与者を表し、カラ格は主語と動作者相当句の両方が有生のとき使用可能であり、ニヨツテは動作の結果を強く含意する受動文において、間接的な関与者^{注1)}を標示するとする。動作の結果を強く含意するタイプの受身がカラ格を取りにくいという指摘は後述の張（1995）や志波（2012）とも一致しているが、果たしてそのような用例がないのかどうか検討する必要がある。

次に張（1995）は従来の研究を踏まえて（1）のような動詞分類モデルを提示し、ニ・カラ・ニヨツテの使い分けを論じている。その際、間接受身しか作らない自動詞はこの分類に組み入れないものの、「噛み付く」「挨拶する」のように、ニ格を取るにもかかわらず、動作行為が動作主以外の個体に及んでいるものについては他動詞として扱っている。また、精神的働き掛け動詞には、働き掛けが言語的または物理的なものとして限定しにくいものを含めている。

そのうえで張は、従来の考察として、カラは原則として動作主が移動の起点としての意味合いを兼ね備えて持つ動詞、あるいはそれに近い動詞、例えば所有の対象移動動詞・情報の対象移動動詞、感情態度動詞、知覚思考動詞などに用いられ、そのような解釈を受けられない、例えば物理的働き掛け動詞、空間的对象移動動詞、性状的对象変化動詞及び対象作成他動詞などの場合にはカラは用いられないと述べている。細川（1986）の「殺す」「壊す」などはこの性状的对象変化動詞に含まれると考えられ、カラ格を用いないという点で両者が同じ立場を取っていることがわかる。

（1）張（1995）の分類



一方張は、このような従来の考察では、精神的働き掛け動詞についてはカラ格の適否については意見が分かれており、さらに、ニとカラ両方が使われる環境において、両者の違いが論じられていないとしている。そのうえで張は、言語的働き掛け動詞・感情態度動詞・知覚思考動詞の3類はニもカラも用いられるが、所有の対象移動動詞・情報の対象移動動詞は「ガ、ヲ、カラ」型では原則的にニだけ用いられるのに対し、「ガ、ヲ、ニ」型では、ヲ格が主語になる場合はカラだけ用いられ、ニ格が主語になる場合は、情報の対象移動動

詞はニもカラも用いられるが、(2)のような所有的対象移動動詞にはカラしか用いられないとする。

(2) 黒人兵は時には直接に女たち {??ニ/から} 食物を与えられた。(飼育)

精神的働き掛け動詞については、寺村(1982)他でも意見が分かれるが、大多数の精神的働き掛け動詞はニもカラも取るものの、そこでカラと共起しない代表的なものとして挙げられている「賛成する、反対する、背く、逆らう、甘える、ねだる、騙す、謀る」などのうち、「ねだる、甘える」などについては、全体としてニほど自然ではないし、「騙す」や「謀る」になると躊躇せずカラを取るという人はいないようであるとしている。しかし、その理由については今のところわからないと述べている。

さらに張は、ニとカラ両方を用いられるケースにおいて、例えば「言う」のように、カラを取ると単なる情報伝達、ニを取ると受影的になるというふうに、弁別的に使い分ける話者もいるものの、そのニュアンスの違いに有意義な差はないが、使用頻度は対象移動性が捉えやすいケースであればあるほどカラが高く、その反対はニが高いと結論付けている。

このように、物理的働き掛け動詞、空間的対象移動動詞、性状的对象変化動詞及び対象作成他動詞や「ガ、ヲ、カラ」型の所有的対象移動動詞・情動的対象移動動詞や一部の精神的働き掛け動詞はカラ格を取らないとしているが、果たして実際の用例ではどうであろうか。また、ニとカラの受身文にニュアンス等の差はないのであろうか。この点も考察する必要がある。

菅井(2007)は、(3)から(5)のような多様な意味役割を持つニ格の用法について認知言語学的観点から包括的に考察し、その意味を一元的に特徴づけるものとして《一体化》を挙げて、それによってニ格の統一的説明を試みている。

- (3) a. 針金を内側に曲げる。[方向] b. 壁にボールを投げる。[到達点]
 c. 手にインクが付いてしまった。[密着点]
 d. スープに調味料を入れる。[収斂先] e. 正門に警備員が大勢いた。[存在点]
- (4) a. 花子を食事に誘った。[目的] b. 子どもに行儀作法を教える。[伝達先]
 c. 音楽の才能に満ちている。[要素] d. 幼虫がさなぎになった。[結果]
 e. この問題は太郎にも解ける。[経験者]
- (5) a. 友達に参考書を借りる。[起点] b. 両親に結婚を反対された。[動作者]
 c. 余りの熱さに気を失った。[原因] d. 早朝5時に集合した。[時間]

菅井は、これらは《融合性》《密着性》《到達性》《接近性》という程度の差はあるものの、《一体化》という単一線上に位置づけられるものであるとする。そのうえで、[起点]ニ格のカラ格との交替について、起点の与格は着点が一方向的に転用されたものであるという池上(1981)の場所理論の分析を援用し、[着点]の与格は主格NPから着点NPへの順方向的なエネルギー伝達が《到達性》を満たしていることを表し、[起点]の与格は順方向的な着点NPへの《到達性》を前提に、その[着点]を[起点]として逆方向に汎用したも

のであると分析する。このような移動主体と起点ないし着点の関係を図示したものが(6) abである。●は主格NPからのエネルギーと移動主体を、○は着点と起点を表す。一方[起点]の奪格は(6) cのように、移動主体の●が起点NPの○から離れている関係を表し、順方向的な動きは前提とされない点で、[起点]の与格が[着点]の与格を前提にしている与格標示と明確に異なるとする。

(6) 菅井(2007)の格標示による移動主体と起点ないし着点の関係

- a. [着点]の与格 —————> ●
- b. [起点]の与格 <————— ●
- c. [起点]の奪格 ● <————— ○

そのうえで菅井は、このような[起点]の格標示に関する基本原則を(7)のように整理している。

(7) 起点の「二格」標示は起点NPへの順方向的な“働きかけの局面”が前提とされ“働きかけの局面”と“受け取りの局面”を併せた全体をプロファイルするのに対し、起点の「カラ格」標示は逆方向的な“受け取りの局面”のみを前景化し、移動主体が起点NPから離れている関係をプロファイルする。

また受身に関する二格とカラ格の違いについては、砂川(1984)などでは二格は直接的に関与するものとされてきたが、菅井は(8)のように、明示的に副詞「直接」が二格・カラ格ともに共起できることから、カラ格も〈直接的〉な関与者を標示し得るとして、砂川の分析は正しくないと主張している。

- (8) a. A国はB国に直接攻撃された。
b. A国はB国から直接攻撃された。

さらに菅井は、受身の動作主を表す二格についても、先に述べた主格NPとの《一体化》が満たされ、動作者相当句は少なくとも二格で標示することによって主格または対格へのエネルギーの到達が保証されており、能動文において主格(ガ格)で標示されていたときと同じ資格をもつとする。一方カラ格はスキーマ的に[起点]として規定されるため、動作者相当句を広い意味で[起点]として解釈できるときにはカラ格での標示が可能になるという。この主張によれば、従来捉えられていたよりも広くカラ格標示が可能であることになるが、この広い意味で[起点]と解釈できるのがどのような場合であるかについて、菅井では詳しく述べられていない。この点を明らかにする必要がある。

また、菅井は、動作者相当句をカラ格で標示した場合でも基本的に二格での標示も同時に成立するため、動作者相当句に関しては二格が無標の格標識、カラ格は有標の格標識であるとしている。そうであるならば、有標であるカラ格を用いるにはそれなりの動機、表

現意図が必要であるということになる。

その点について菅井は、ニ格・カラ格それぞれの本来の意味から、カラ格では《動作者相当句→主格NP》という一方向的な解釈しか成立しないのに対し、ニ格は《動作者相当句→主格NP》と《主格NP→動作者相当句》という両方向をもつとする。例えば、(9)bのように動作者相当をカラ格で標示した場合は、検察から太郎への働きかけのみが前景化され、逆向きの太郎から検察へのエネルギー（情報）の伝達は含意しないのに対し、(9)aのように検察をニ格で標示した場合は検察から太郎への働きかけが前景化されるだけでなく、太郎の意志と無関係に検察へのエネルギー（情報）の伝達も起こり得るため、偶然に太郎の話を検察が耳にした場合や検察が意図的に太郎の話にそば耳をたてたというような場合もあり得るとする。

- (9) a. 太郎は検察に事情を聞かれた。 b. 太郎は検察から事情を聞かれた。

さらに菅井は、カラ格は、その「起点」を具象化するという本来の意味から、副次的に離脱を含意するため、主格や対格と離脱した状態をプロファイルすることになって、エネルギー到達が保証されないため、(10)のように主格または対格へのエネルギーの到達が保証されなければならないときはカラではなく、ニ格で標示されるとする。(10)bが不適合なのはそのためであるという。

- (10) a. 太郎は何人かの人に襲われる。 b. *太郎は何人かの人から襲われる。

一方動作者相当句をニ格で標示できないケースはニ格NPが「着点」として解釈される可能性がある場合であるとする。これはニ格が着点か受身の動作主か曖昧になるためであることは従来から指摘されているとおりであるが、菅井はこのような場合、着点としての解釈が優先されるため、(11)のような場合、ニ格標示の方の容認度が低くなるとする。

- (11) a. #会議資料が秘書に配布された。 b. 会議資料が秘書から配布された。

即ち、主格NPと動作者相当句とが2項的に結び付くとき、動作者相当句は基本的にニ格で標示され、動作者相当句が「起点」として解釈できるとき、あるいは、主格NPと動作者相当句とが離脱した状態にあることをプロファイルするとき動作者相当句はカラ格で標示されるということになる。この「離脱した状態」か否かがカラの可否にどのような影響を与えるのかも考察する必要がある。

一方和氣（2012）は、砂川（1984）以降の論考は受動文の動作主はニ格が普通で、カラ受動文は特殊なものであるという捉え方であるとこれを批判し、カラ格受動文はかなり広範囲に使用されていると述べ、「中納言」で収集した用例の分析により、カラ格でなければならない受身文について以下の3つを挙げる。

- ①発行・発売等（発する動き）

②送付・授与等（相手先への位置の変更）

③その他の動詞

①は、「刊行する・公表する・創刊する・発表する・発売する・放映する」など、動作主は状況の発生場所であるという意味で起点的であるが、移動を表すわけではないという理由で着点は含意されない動詞であり、その意味で菅井の言うニ格NPが「着点」として解釈される可能性がある場合には当てはまらない。

また、存在しなかった対象物が存在することになるという点で、生産動詞的な側面を持っており、ニヨッテも可能であるとされる。

(12) 同じく野上豊一郎の監修により昭和十七年から十九年にかけて創元社から刊行された『能楽全書』全六巻は、戦前の能楽研究の集大成とも言えるものだが、(田代慶一郎『謡曲を読む』朝日新聞社 1987)

(13) *～能楽全書J全六巻が創元社に刊行される

和氣は、このタイプの受身でニ格が用いられないのは、受益者を想定できない、益岡(1987)のいわゆる降格受動文にあたるためであるとする。このようなタイプの受身は迷惑受身の場合を除いて通常有情物は主体にならない。本稿での考察対象は有情物が主体となった受身であるため、この点に関しては深くは立ち入らないことにする。

②は、「送る・配る・出願する・振り込む」など、動作主が相手に向けて対象物を動かす動きを表すもので、相手が着点としての意味役割を持ちうるものであるとする。これは、菅井のニ格NPが「着点」として解釈される可能性がある場合と同じであり、ニ格は用いられない。

(14) 花鈴の生んだ女の子の身の上に起こったことを、旅行から帰った良は、留守番電話に入っていた母のメッセージと、花鈴から送られた何通かのeメールで知った。
(中上紀『パラダイス』恒文社 2001)

(15) ??花鈴に送られた何通かのeメール (cf. ??何通かのeメールが花鈴に送られた)

なお、このような動詞を用いた受身文には、相手を主体としたものと対象を主体にしたもの2つのタイプの受身文が可能であるが、対象を主体としたものは降格受動文で受影性がないため、もともとカラ格でしか標示できないと述べている。

③には、「言う、依頼する、教える、聞かす、頼む、注意する、表彰する、褒める、任す」など、従来からニ格／カラ格の交替を起こすとされてきた動詞と、「搾り取る・葬る・つねる」など、従来の研究からすれば非典型的とせざるを得ないようなタイプのカラ受動文の用例もいくつか検索されているとする。そして、①や②のように、カラ格しか選択できない状況でカラ格が用いられたのと異なり、ニ・カラいずれも選択可能な状況の中で意識的にカラ格が用いられていることになり、「使い分け」としてカラ格の選択について述べるのであれば、(16)(17)のような用例についていうべきであるとしている。

(16) 六十六年から始まる後のプロレタリア文化大革命で劉少奇は、自らが用いたこの運動の手法によって、毛沢東から葬られることになる。

(正木義也『台湾の悲劇』綜合法令出版 2000)

(17) タクヤさんまで、ユミからツネられてたもの。最初は四人で泳いだり、遊んだりしてたんだが、そのうちに、自然とふた組のカップルになっちゃって。

(『禁断の投稿ドキュメント』大洋図書 2004)

(17') タクヤさんまで、ユミにツネられてたもの。

そのうえで和氣は、カラ格が選択される理由や、全体としてどのようなカラ格受動文のタイプが想定できるかは「ここではこれ以上立ち入らない」としているが、先行研究で言われてきた「起点性を表示する」という理由だけでなく、「二格による受影性の強制を避ける」という理由があるのではないかと指摘する。和氣によれば、「言う」「教える」などの受動文では、相手が単純に情報を受け止めたという以上にそのような動作を受けることによって、結果的に相手は何らかの情報を保持した状態にするという解釈が可能であり、その点で、相手に対する受影性が明確であるが、その一方で、表現者がそのような受影性の解釈の強制を省いて単純な事態として受け手側から事象を記述したい場合にカラ格を選択するという用法が広がりを見せつつあるのではないかと主張している。これは、二格とカラ格の受身にニュアンスや受影性等に有意義な違いはないとする張(1995)とは異なる立場である。

筆者も和氣同様二格の受身とカラ格の受身とでは何らかの違いがあるという立場であるが、一方でカラ格(17)とカラを二に変えた(17')とで受影性という意味でどのような違いがあるのかは疑問である。

このように、和氣は一貫して二格受動文に受影性を認める立場であり、二格受動文を選択する余地がある際にカラ格を選択する理由を、受影性の解釈をキャンセルするためとしているが、動作やその結果等を受け止めること及びそれを保持することと受影性の関連は明確ではないし、そもそも、受影性の有無の判断にも疑問が残る。ただし、カラ格を選択する動機が重要であるという指摘はそのとおりであると言える。

3. カラ受身文の分析

3. 1. 用いられる動詞

カラ受身文を「中納言」で検索した結果、主体及び動作主ともに有情であるAA受身文は全524例、動詞は218種類であった。志波(2012)はコーパスを用いて収集した膨大なデータを基に、主語や動作主、動詞の語彙的な意味や項などの様々な要素が統合された受動文の構造的なタイプについて詳細に記述し、動作主が取る格も含めた包括的な受身文の分析を行っている。このうち、本稿の考察の対象が有情有情の直接受身文であることから、持ち主の受身や迷惑受身を外すと、その分類は(18)のようになる。この218種類の動詞を志波に従って分類した。ただし、いわゆる使役受身である強制使役受身は一般の受身とは性質が異なるため、本稿では考察の対象から外している。そのうえで、張(1995)の分類との関連を示し、それぞれ動作主に用いられるとされる格標示について考察する。

(18) 志波 (2012) の分類

| | | |
|-----|---|-----------|
| 変化型 | } | 位置変化型 |
| | | 随伴型 |
| | | 生理的变化型 |
| | | 社会的変化型 |
| 動作型 | } | 接触型 |
| | | 催促型 |
| | | 強制使役型 |
| 認識型 | } | 知覚型 |
| | | 知的認識型 |
| 態度型 | } | 感情＝評価型 |
| | | 知的態度型 |
| | | 表現的態度型 |
| | | 呼称型 |
| | | 評価動作的態度型 |
| 相手型 | } | 接近的態度型 |
| | | 譲渡型 |
| | | 相手への動作型 |
| | | 相手への発話型 |
| | | 相手への提示型 |
| | | 相手へ要求的態度型 |
| | | 相手への態度型 |

【変化型】

まず「位置変化型」は、有情者の主語が他者からの働きかけられによって何らかの位置的な変化をこうむることを表す、「移す・入れる・送る・運ぶ」などの動詞である。これらは動作主が問題にされていない例が多いとされる。一方「随伴型」は、主語に立つ有情者が動作主の同伴する空間的な位置変化を受けることを表す。「連れていく・導かれる・伴う」などがこれにあたり、動作主は二格を取るとする。これらの2つの型は、カラを用いないとする張の「空間的対象移動動詞」に対応すると思われるが、張や志波の指摘とは異なり、本調査では、前者では取り残す・釣り上ゲル、後者では引き出す・呼び出すなどでカラ格を用いている例があった。

「生理的变化型」は主語に立つ有情者が、動作主によって身体の生理的な変化を引き起こされることを表す「殺す・傷つける・食べる」などの動詞であり、動作主は二格を取るとされる。しかし、本調査ではカラを用いたものに起コス・蹂躪スル・焼クなどがあった。

また、「社会的変化型」は主語に立つ有情者が、動作主の社会的権力の行使により、その社会的立場に変化を被ることを表すとされる。これらは、「雇用する・解任する・入社する」などの「社会的状態変化型」を基本とし、それ以外には「選ぶ・採用する・指名する」のような「社会的地位変化型」、「刑務所に入れる」などの「社会的位置変化型」及び、「勝つ・

負ける」などの「勝敗決着型」の3つがある。「社会的地位変化型」は、「位置変化型」からの派生で、ニヤカラで表される場所が社会性を帯びた場所である場合にこちらに移行するとされる。

格標示に関しては、「社会的状態変化型」は動作主を明示しない場合が多く、「社会的地位変化型」「社会的地位変化型」「勝敗決着型」はニ格となるが、「社会的地位変化型」に関しては、位置変化動詞が用いられるため、動作主が出所と一致している場合にはカラ標示も可能となる。本調査ではこれらを「社会的変化型」としてまとめて扱うが、派遣スル・解放スル・放逐スルなどの例があった。いずれも出所を表す名詞が動作主となっているため、カラを用いることに問題はないことがわかる。

なお、「生理的変化型」「社会的変化型」は、張の「性状的对象変化動詞」や「空間的对象移動動詞」にあたると思われるが、いずれもカラ格を取らない動詞であるとされているものである。

【動作型】

「接触型」は主語に立つ有情者が動作主から接触の働きかけを受ける「抱く・なでる・たたく」などの動詞であり、動作主はニ格を取るとされる。張の「物理的働き掛け動詞」にあたり、そこでもカラは取らないとされているが、本調査ではカラを用いた例として、袋叩キニスル・ナグル・押サエツケルなどがあった。菅井はエネルギー到達が保証されなければならないときはカラではなく、ニ格で標示されるとし、例えば襲うはカラを取らないとしている。これらは志波の分類ではこの「接触型」にあたると思われるが、本調査では上記のほかにも引ッ張ル・攻撃スル・襲ウ・叩クなど、接触、即ちエネルギーの到達を表す動詞にカラ格が用いられている例が見られた。

(19) また、忍者は敵から襲われ、危ういシーンで丸太に入れ替わって攻撃を避けるというのも定番のシーンですね。

(gooより。歴史エッセイ 忍者・忍術の研究ノート)^{注2)}

一方「催促型」は「あおる・誘う・けしかける」など、主語に立つ有情者が動作主から何らかの動作へと刺激する活動を受けることを表し、動作主はニ格・カラ格いずれも取ることができるとされる。本調査では、誘ウ・招待スル・持ちカケルなどがあった。

この2つの型は、張の「精神的働き掛け動詞」にあたり、カラ格を取るものと取らないものがあるとされる。

(20) (前略) 例の開放的な大阪人から誘われまして (後略) †^{注3)}

なお、この「動作型」にはもう1つ、「強制使役型」がある。これは、主語に立つ有情者が使役の対象となるものであり、本稿の考察の対象とはしないことは前述のとおりである。

【認識型】

「知覚型」は主語が動作主に自分の姿や所作・動作を知覚されることを表す、「見る・聞く・気づく」のような動詞であり、動作主は二格で表されるとするが、本調査では同様の動詞にカラ格を用いた例が観察された。「知的認識型」は主語が動作主である相手に、自分の状態や所有する情報、性質を知的な領域で認識させることを表す「知る・心配する・理解する・悟る」などの動詞であるとされる。こちらも動作主は二格を取るとされるが、本調査では悟るなどでカラ格を用いた例が観察された。この2つの型は、張の「知覚思考動詞」に対応すると思われるが、張によればこれらはカラ格も取るとされ、goo等でも用例が見られた。情報の移動という点では受身の主体から動作主への移動となるが、動作主がカラで表されるのはどうしてであろうか。この点は後程考察する。

- (21) それで私自身は誰からも気づかれずに、しばらくそこにつきささったままでした。
すくなくとも三人から見られた†
- (22) その熱視線はもしかして……！ イケメンから見られている時に女子が取る○○
な行動 (goo、マイナビウーマンより)

【態度型】

この型には、対象に対する感情・評価・判断・捉え方を表す「認識的態度」と、対象への物理的働きかけにおいて、意図を持って対象へ近づいていく心理的作用を表す「動作的態度」がある。前者には「感情＝評価型」「知的態度型」「表現的態度型」「呼称型」、後者には、「評価動作的態度型」「接近的態度型」がある。

まず「感情＝評価型」は、主語が動作主から何らかの感情や評価のこもった心理的作用を受けることを表す、「愛する・憎む・嫌う・尊敬する」などの動詞で、「嫌う」のような感情評価的態度を表す動詞は二格・カラ格いずれも取りうるのに対し、「思う」のような認識を表す動詞の場合は二格のみを取るとされる。これらは、カラ格も取りうると思われる張の「感情態度動詞」にあたると思われるが、本調査では、慕う・嫌う・尊敬スルのような感情評価的態度を表す動詞のほか、望ム・否定スル・疑ウのような認識を表す動詞についてもカラ格が観察された。

「知的態度型」は主語が動作主から何らかの価値づけや判断といった心理的作用を受けることを表す、「見なす・思う・考える」などの動詞であり、動作主には二格が用いられるとされる。この型は先の「知覚型」・「知的認識型」とともに張の「知覚思考動詞」にあたると思われる、カラ格も可とする張の指摘のとおり、本調査でも見ナス・見ル・思うなどの用例があった。

- (23) いつしか気が付けば、周囲からは二人で一組と見なされるようになっていた。†

「表現的態度型」は、主語が動作主から言語活動による感情＝評価的な態度を受けることを表し、動作主は二格で示されるとされている。その例として「ほめる・叱る・非難する」などが挙げられている。これは、張の「言語的働き掛け動詞」にあたり、張によればカラ

格も可能とされる。本調査でも褒メル・咎メル・責メルなどがあつた。言語活動により、評価的情報が動作主より移動することから、カラを用いることに問題ないと思われる。

また、志波は「呼称型」として、主語が動作主から何らかの呼称を付与されることを表す「呼ぶ・称する・名づける」のような動詞を挙げ、動作主は二格でマークされるとする。これも広い意味での張の「言語的働き掛け動詞」に分類できるとと思われるが、こちらはカラ格も可能とされている。本調査でも異名ヲツケル・～呼バワリニスル・呼ブがカラ格とともに用いられている。

さらに、「評価動作的態度型」では、主語が動作主から何らかの評価を伴った扱いを受けることが表される「いじめる・いたぶる・笑う」などの動詞が挙げられており、動作主のマーカ―として二格・カラ格いずれも取りうるとされている。これは張の「精神的働き掛け動詞」にあたると言えるが、カラ格が取れるものと取れないものがあるとされる。本調査では大事ニスル・騙ス・無視スル・ナメルなどがあつた。このうち騙スは張などによってカラ格を取りにくい動詞の一つとされている。この点についても後述することにする。

最後に「接近的態度型」は主語が動作主から近づいたり遠ざかったりする態度を受けることを表し、動作主は二格・カラ格ともに取れるとされているが、「追う・つける・狙う・取り囲む」などがその例である。しかし、志波のこの「接近的態度型」には、「狙う」や「追う」のように、行為そのものだけでなく、相手に対する態度が含まれているものもあるが、「取り囲む」のように、必ずしもそのような態度が含まれているとは思えない動詞も含まれている。その意味で、この分類や名称には疑問が残る。いずれにしてもこの型は、張の「物理的働き掛け動詞」にあたるもので、張は二格のみを取るとしているが、本調査では少数ながら接近スル・追ウがあつた。ただし、接近スルは二格を取る動詞であるため、本来であれば後述の「相手型」に分類されるべきものであると思われるが、志波の「相手型」には当てはまる型がない。そこで、本稿では便宜上「接近的態度型」に分類している。

以上は、主語に立つ有情者が動作の直接対象として動作主の働きかけを受けることを表す受身である。一方で対応する能動文では動作主が二格で標示される受身文もある。志波はこれらを「相手型」と呼んで、他動詞による受身とは区別している。

【相手型】

このグループにはまず、「譲渡型」がある。これは、主語が動作主から対象の所有権（占有権）を譲渡されることを表す「与える・送る・配る・提供する」などの動詞で、動作主は二格またはカラ格で標示されるとする。これは張の「所有的対象移動動詞」にあたり、張もカラ格で標示可能であるとしている。本調査でも提供スル・配給スル・寄進スルなど、多数の用例が観察された。

「相手への動作型」は主語が相手を着点として動作主が物理的に対象を位置変化させる動作を受けることを表し、「(石を)ぶつける・(服を)着せる・(銃口を)向ける」などがその例として挙げられている。これらは動作主が二格で表されるとされている。この型は、「動作型」の「接触型」・「催促型」と併せて二格を取る張の「物理的働き掛け動詞」にあたると思われる。本調査では少数ながら鉄砲ヲ放ツ・レンズヲ向ケルという用例があつた。

ここでカラ格が用いられているのはなぜか、検討する必要となる。

「相手への発話型」は「言う・聞かす・告白する」などの発話動詞が用いられ、動作主としては二格・カラ格が可能であるとされる。張の「情報の対象移動動詞」にあたり、カラ格も用いられるとされる。本調査でも77例の言ウを筆頭に、知ラス・告白スルなど、多くの例が観察された。

「相手への提示型」は、主語が対象を提示する相手として、相手の動作主から、対象を自身の認識領域に合わせる動作を受けることを表すとされ、「見せる・指示する・紹介する」などがその例として挙げられている。二格・カラ格いずれも取ることができるとされるが、こちらも上の「相手への発話型」同様、張の「情報の対象移動動詞」に含まれると言える。本調査では、指導スル・教エル・伝授スルなどがあつた。「相手への要求的態度型」は主語が、相手の動作主からある動作を実行する／しないことを求められることを表し、動作主は二格またはカラ格を取るとされる。「頼む・要求する・強制する・迫る」などがこれにあたるが、これには張の「言語的働き掛け動詞」と「精神的働き掛け動詞」が対応すると思われる。前者は二格・カラ格を取るが、後者はカラ格を取るものと取らないものがあるとされる。本調査では、頼ム・指示スル・勧メル・期待スルなどの用例が見られた。

最後が「相手への態度型」で、主語が相手を対象として動作主から何らかの態度を含んだ働きかけを受けることを表す、「そむく・こびる・つくす」などがこれにあたる。動作主は二格・カラ格いずれも取りうるとされる。張の精神的働き掛け動詞に含まれると言えるが、この中には、従来カラ格を取りにくいとされてきた「賛成する、反対する、背く、逆らう、甘える、ねだる、騙す、謀る」のうち、「背く・反対する・逆らう」が例として挙げられていた。本調査では、これらの動詞は用いられておらず、この型に分類できるのは注目スルと嫌疑ヲ掛ケルの2つのみであつた。

以上のように、志波は対応する能動文では動作主が二格で標示される受身文を「相手型」として区別しているのに対し、張は、二格を取るにもかかわらず、当該動作行為が動作主以外の個体に及んでいると思われる場合はすべて他動詞として扱っているという違いがある。これらの動詞は、自動詞であっても受身にしても迷惑性の生じない直接受身となることから、筆者も張同様に「相手型」として区別する必要はないと考える。また、前述のように、二格を取りながら「相手型」に適切な分類がない動詞もあつた。このように志波の分類には疑問も残る面もあるが、今回はそれには立ち入らない。

いずれにしても、以上の考察から、志波の「位置変化型」・「随伴型」・「生理的変化型」・「接触型」は張の「空間的対象移動動詞」・「性状的对象変化動詞」・「物理的働き掛け動詞」に対応し、いずれもカラ格を取らないとされているが、頻度の高低に差はあるもののこれらの動詞がカラ格で標示される用例があることがわかつた。中でも「接触型」については、菅井はエネルギー到達が保証されなければならないときはカラで標示できないとしているが、襲ウのように、その到達が含意されている動詞についてもカラ格の例が観察された。さらに、志波は「知覚型」・「知的認識型」・「知的態度型」はカラ格を取らないとしているが、これらは張の「知覚思考動詞」としてカラも可能とされており、本調査でもカラ格が観察された。張の「物理的働き掛け動詞」にあたる「相手への動作型」も同様である。

このように、原則として動作主が移動の起点としての意味合いを兼ね備えて持つ動詞やそれに準ずる動詞、対象移動性の高い動詞に用いられやすいという張などの主張より広い範囲で、動作主にカラを用いる話者あるいは書き手が存在することは注目すべきことである。これはまさに和氣の指摘するように「従来の研究からすれば非典型的とせざるを得ないようなタイプ」のカラ受動文が用いられているということである。即ち、菅井の指摘に反し、主体からのエネルギーが到達している場合も含め、張よりも広い意味で、動作者相当句が〔起点〕として解釈されており、その結果カラ格での標示がより広く可能と捉えられていることになる。

3. 2. 〔起点〕と解釈されるもの

では、これらの動詞でカラを用いる人はどのような理由でそのような選択をしているのであろうか。そこであらためて志波や張でカラ格が用いられないとされているにもかかわらず、本調査でカラ格標示の用例があったタイプの受身を検討し、どのようなものが広い意味での〔起点〕と捉えられうるのかを考察する。

●位置変化型

AはBから取り残される
AはBから釣り上げられる

●随伴型

AはBから引き出される
AはBから呼び出される

●生理的変化型

AはBから起こされる
AはBから蹂躪される
AはBから焼かれる

●接触型

AはBから殴られる
AはBから抑えけられる
AはBから襲われる

●相手への動作型

AはBから鉄砲を放たれる

位置変化型の取り残スについては、AとBが同じ地点にいたが、Bが移動したためAがその場所に残ることを表す。Bが現地点を起点とし移動していることからカラが用いられたと考えられる。それ以外はBからAに働きかけが向かっていると言える。その中には、(24)(25)など、叩く・殴る・押サエツケルのように、実際にエネルギーがBからAに移動する場合も含まれる。「相手への動作型」では、動作のエネルギーや物質が移動していると考えられる。

(24) 断ったのに、そいつを好きな男からなぐられたためがね。†

(25) (前略) 二、三日後の夜半、私は眠っているところを夫から押さえつけられた。†

●知覚型

AはBから気付かれる

●知的認識型

AはBから悟られる

●知的態度型

AはBから～と思われる

また、張の知覚思考動詞にあたる知覚型・知的認識型・知的態度型や張の精神的働き掛け動詞の一部の場合、BからAに何が移動しているのかと言えば、例えば共感や反感といった感情や視線等の感覚などが移動していると捉えることができる。探知機からセンサーの電波等が出て、物体を捉え、知覚・認識するようなイメージである。

このように、位置変化型・随伴型・生理的変化型・接触型・相手への動作型、精神的働き掛けを表す動詞は、BからAに対して働きかけやエネルギー・物質、感情・感覚の移動が行われる動詞である。一方知覚型・知的認識型・知的態度型は物理的な働きかけはないが、視線等がBからAに働いていることがわかる。そのような意味で、それが従来言われてきた物や情報の移動だけではなく、働きかけやエネルギー、感覚など、より広い意味で、動作者相当句が何らかの意味で「起点」として解釈できると感じて、より広くカラ格での標示が可能であると捉える話者・書き手もいるということになる。

3. 3. 精神的働き掛け動詞

カラを取るかとらないかで最も判断が分かれるのが、精神的働き掛け動詞であるとされるが、張(1995)では、従来カラと共に起しない代表的なものとして挙げられた「賛成する、反対する、背く、逆らう、甘える、ゆだねる、騙す、謀る」などについて、「ねだる」と「甘える」はカラを取らないこともないとする人もいるが、二ほど自然ではなく、「騙す」や「謀る」となると、躊躇せずにカラを取るという人はいないようであるとしているのは前述のとおりである。一方、反対スル・背ク・逆ラウは、志波のAA相手への態度型にあたり、動作主に二またはカラを取るとされている。

このような動詞をあらためて「中納言」で検索してみると(26)のように、騙スが非常に多く、動作主が明示されている139例のうち、二格は134件、カラ格は5件のみと、圧倒的に二格が多く用いられていることがわかる。これは張の指摘が実際の用例でも確認されたことになる。次に多かったのが反対スルで、動作主が標示されているAA受身67件中、二格が54件、カラ格が13件と、こちらもカラ格も用いられてはいるが、二格のほうが多く用いられている。一方、甘エラレルは35例、ネダラレルは30例であったが、動作主を明示した例は少なく、それ以外の賛成スル・反対スル・背ク・逆ラウ・謀ルは、そもそも出現頻度自体が低いため、ここからこれらの動詞の受身形にカラが用いられにくいとは判断できなかった。

(26) 精神的働き掛け動詞の受身の動作主標示

注4)

| | 書き | | 名大 | | 話し | | 合計 | |
|------|----|-------|----|-----|----|---|----|-------|
| | から | に | から | に | から | に | から | に |
| 賛成する | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 反対する | 9 | 50 ↑ | 0 | 1 | 0 | 3 | 13 | 54 ↑ |
| 背く | 0 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 |
| 逆らう | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 甘える | 2 | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 |
| ねだる | 0 | 9 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 11 |
| 騙す | 4 | 123 ↑ | 0 | (3) | 1 | 5 | 5 | 134 ↑ |
| 謀る | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

このうち、甘エルについては、Google・教えてgoo及びYahoo相談室の用例を検索してみると、計139例のカラ甘エラレルが用いられていることがわかった。一方、ニ甘エラレルは399例であるから、ニ格のほうが3倍程度多いことは事実であるが、カラも用いられないわけではないことがわかる。では、ニ格で表される動作主とカラ格で表される動作主とで何か違いがあるのであろうか。

一般の社会通念として、甘えるのは男性よりは女性、年上よりは年下というイメージがあるが、用例を見ると、女性ではなく男性、年下ではなく年上が甘えるという意外性が表されているものにカラが多く用いられる傾向があるように思われる。これらは次節で述べる、両方向のどちらかを明示するという用法とつながっているが、(27)のように、カラを用いることで社会通念とは反対の方向であることを強調する機能を担っていると言える。そのバリエーションとしては「年上の男性」「年上の女性」あるいは「年下の男性」があった。

(27) それは、私の見た目は気が強そうな雰囲気に見られてしまうことが多く、男性の方から甘えられることしか今までなかったからです。(教えてgoo)

この点を確かめるため、社会通念上甘えることが普通であると思われるがちな女性や彼女、子供などを表す名詞と、それ以外の名詞のそれぞれの助詞との出現数を(28)のように χ^2 乗検定にかけたところ、 χ^2 乗値は4.157、p値は0.041となり有意水準5%で有意差が認められた。

(28) 「甘える」の動作主

| | 普通 | 非普通 | 合計 |
|----|-----|-----|-----|
| から | 62 | 77 | 139 |
| に | 218 | 181 | 399 |

一方「女性」や「彼女」の場合には、単に感情の出所という場合もあるが、(29)のように、感情というよりは動作性を帯び、性的な働きかけのニュアンスを含む場合も多い。これも、カラを用いることで、通常のそのような働きかけが男性側からなされるという社会通念とは逆の方向の働きかけであることが表されている故であると言える。

(29) ケンカの後には女性から甘えられたら、どう思いますか? (教えてgoo)

このように、その動詞自体が二格・カラ格と用いられやすいかというだけでなく、同じ動詞であっても、カラを用いて出所を意識することで、方向性が明確になり、通常とは違う意外性を強調するという話し手・書き手の意図が込められる場合があることがわかった。

反対スルについては、Googleで検索したところ、カラ格が少なからずあったが、動作主は「親・家族・友人・周り・みんな」と多様であり、このような傾向は見られなかった。ネダルについては、カラが計22件と少ないが、彼氏5、彼女11、息子・娘・孫など、自分の子供や孫を表す言葉が5、ホステス・嬢が2、あとは小姑を表すコトメ、従業員が各1である。一方二格は、彼氏5、彼女11、子供・孫類が16、あとはファン類4など計36件で、こちらも二格のほうが多いが、何らかの意味で上位の者に甘えて金品の授与を求めている動詞の意味特徴から、どちらも彼女や子供類が多く、用いられ名詞に大きな差は見られず、甘エルの場合のような通常とは異なる方向性を表しているわけでもないように思われる。

以上の考察から、カラ受動文が受影性の解釈をキャンセルするために選択されるという和氣の主張を裏付ける例は観察されなかったが、甘エルのように、通常何らかの意味で弱い立場の者が強い立場の者に愛情や保護などを求めるというように、方向性がある程度ははっきりしている動詞の場合、その社会通念と逆の方向性を表す場合にカラを用いる傾向があることがわかった。この点もカラが起点を表すということから派生した用法であると言えるであろう。

その点で言えば、騙スについても当てはまりそうであるが、どうしてこの動詞についてカラが用いられないのかは依然として明らかではない。

4. カラが選択される理由

二格を取るかカラ格を取るかは、これまでの考察のように、動詞の意味や要求する助詞によって決まる場合もあるが、比較的多くの動詞に二格・カラ格いずれも用いられることがわかった。それでは、ここであらためてどちらも用いられるにもかかわらず、カラ格を用いる動機を考察する。

①二つのサイドのどちらからかを明示

下の(30)から(32)の例は、いずれも二つのサイドがあり、そのいずれか、または両方が動作主であることを示している。(30)は「上と下」、(31)は「検察側と弁護側」という二つの立場である。(32)のように「～の方」をつけてその方向性を強調している例もあった。ちなみに起コスは一般にはカラを取りにくいとされる動詞である。

- (30) 上からも下からも無茶苦茶に責められているわけよ。†
(31) (前略) 取り調べを行ったとしたら、裁判で弁護側から誘導尋問として厳しく追及されるのは必定であろう。†
(32) 子供の方から散歩に行きたいっていう風に起こされるもんですからゆっくり寝てられないんでちょっと大変なんですけれども。†

②出所を強調

上の両方向のどちらかを示す用法と重なるところはあるが、ある行為等の出所を強調する用法もある。(33)(34)のように「一方的に」という副詞を伴ったり、「～の口から」のように、さらにこれを強調したりする表現が追加されることもある。

- (33) とくに、校長から一方的に「問題教師」扱いされた先生の苦しみは深い。†
(34) 石田本人の口から僕がその事実を知らされたのは、ついきのうのことでした。†

③働きかけの勢い・強さを強調

カラを用いると、動作主から主体に対する働きかけが強く、勢いがあるように感じられる場合がある。これも、カラを用いる動機の一つではないかと思われる。

- (35) 今日もそんなふうにゆきさんからハッパをかけられた。†
(36) (前略) 団力は、関西太郎からボロボロになるまで塗り取られることはなかったが、(後略) †

④出所と動作主両方の意味を標示

さらに、カラ格で示されている名詞が出所と動作主の両方を表す場合がある。(37)のように、3. 1. で触れた「社会的変化型」の派遣スル・解放スル・放逐スルなどもこれに含まれる。ときには、(38)のように、組織やその場所に属する人を表すのか場所を表すのかあいまいな場合もある。

- (37) (前略) 父・馬杉市蔵たちと共に、甲賀の山中大和守から武田家へ派遣された忍びの者の一人である。†
(38) (前略) 第二の輝かしい日は十八年後に教会から追放された日でした。†

5. まとめ

以上さまざまな用例を用いて、動作主をカラで標示する有情の受身に用いられる動詞やその用法を考察した。その結果、従来はカラを用いないとされていた位置変化型・随伴型・生理的変化型・接触型・相手への動作型や知覚型・知的認識型・知的態度型などの動詞でも、何らかの意味で動作主が起点と解釈される場合には広くカラが用いられていることが明らかになった。これらは、従来指摘されていた物や情報だけではなく、働きかけやエネルギー、感情・感覚など、より広い意味での移動が話し手・書き手にイメージできる場合

であることがわかった。

その中には、起点を具象化するという本来の意味から副次的に離脱した状態を含意するというカラ格本来の意味からは外れた、「襲う」のようなエネルギー到達が保証されなければならない動詞も含まれている。

これらの中には必ずしもまだ一般的とは言えないものもあると思われるが、これまで考えられていた以上に広い範囲でカラ格が用いられていることは間違いない。その一方で精神的働き掛け動詞の中にはカラが用いない例もあった。

また、「甘える」の場合など、同じ動詞であっても、社会通念とは異なる動作主である場合などにカラが選択される傾向があることもわかった。加えて、二つのサイドのどちらであるかという方向性を明確にしたり、出所を強調したりする場合や働きかけの勢い・強さを示す場合、さらには動作主が同時に移動の出所である場合などにもカラが用いられることが明らかになった。

ニ格がカラ格と交替する理由について、和氣は受影性の解釈の強制の排除を挙げ、張は、カラを取ると単なる情報伝達、ニを取ると受影的になるというふうに弁別的に使い分ける話者もいるものの、そのニュアンスの違いに有意義な差はないとしているが、やはり起点を表すカラ格の特性から、上記のような用法の違いが生じていると言えるであろう。

6. おわりに

本稿では、コーパス検索アプリケーション「中納言」等で収集した用例を中心に、動作主をカラで標示する有情の受身に用いられる動詞やその用法を考察した。その結果、従来の指摘よりも広い意味で、動作主が起点と解釈される場合にはカラが用いられていることがわかった。また、同じ動詞であっても、社会通念とは異なる動作主である場合など、何らかの意味で出所や方向性を強調する必要がある場合にカラが用いられることも明らかになった。このように、受動文でカラ格を用いる理由・動機はいろいろあるが、どれも起点としてのカラ本来の意味から生じたものであることがわかった。

今後はさらに多くの用例にあたって、カラ受身文の用法をより明確にしていく必要がある。特に動作主をカラ格では標示できない精神的働き掛け動詞の特徴とその理由を明らかにしていくことが、筆者の今後の課題である。

【注】

- 1) なお、ニヨッテが間接的な関与者を表すことについては菅井（2007）に反論が示されているが、本稿の考察の対象ではないのでここでは触れないこととする。
- 2) <http://ncode.syosetu.com/s1047d/>（リンクフリー）
- 3) †は全て、「中納言」から採取した用例であることを表す。
- 4) †は表示された範囲の数で、実際にはそれ以上の用例があったことを表す。

【参考文献】

志波彩子（2012）『コーパスに基づく日本語受動文の実態』（早津恵美子監修『コーパスに基づく言語学教育研究資料5』）

- 柴谷方良（1978）『日本語の分析』大修館書店
- 菅井三実（2007）「格助詞の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17：113－135
- 砂川有里子（1984）「「ニ」と「カラJ」の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』12：71－87 大阪外国語大学研究留学生別科
- 張麟声（1995）「ニとカラとニヨッテ—受身文における動作主マーカー—」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法』上 くろしお出版, 131－141
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味』I くろしお出版
- 細川由紀子（1986）「日本語の受身文における動作主のマーカーについて」『国語学』第144, 1113－124 国語学会
- 益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版
- 和氣愛仁（2012）「コーパス検索アプリケーション「中納言」を利用したカラ格受動文の調文法的ヴォイスとニ格名詞句」『筑波日本語研究』16：1－30 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----|---------|---|------------|--|----|-----|-----|----|---|----|----|----|---|-----|
| | | | | 突き上げる | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 追基する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 追下る | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 物理的働き掛け動詞 | × | 接近的態度型 | ○ | 追う | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| | | | | 迎える | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 貸与する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 提供する | | 1 | 1 | | | 1 | 1 | | 1 | | 5 |
| | | | | 配給する | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| | | | | 授与する | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 貸け | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 寄進する | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 贈る | | | 1 | 8 | | | | | | | 9 |
| | | | | 寄贈する | | | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 送る | | | | | 1 | 1 | 1 | 2 | | 2 | 7 |
| | | | | 送付する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 発送する | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| | | | | 配布する | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| | | | | 届ける | | 1 | 1 | | | | | | | | 2 |
| | | | | 与える | | | | | | | 1 | 1 | 2 | | 4 |
| | | | | 渡す | | 1 | 1 | | | | | | | | 2 |
| | | | | 手渡す | | 1 | 2 | | | | | | | | 3 |
| | | | | 託す | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 提出する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | のれん分けする | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 物理的働き掛け動詞 | × | 相手への動作型 | × | 鉄砲を放つ | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 病気を移す | | 1 | 1 | | | | 1 | | | 2 | 4 |
| | | | | レンズを向ける | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 言う | | 4 | 16 | 18 | 8 | 1 | 15 | 4 | 11 | | 77 |
| | | | | 告げる | | | 1 | 2 | | | | | | | 3 |
| | | | | 声を掛ける | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 思想を置く | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 知らせ | | 1 | 3 | 3 | | | | | | | 7 |
| | | | | 申し渡す | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 発信する | | | | 1 | | | 1 | | | | 2 |
| | | | | 報告する | | | | 2 | | | | 1 | | | 3 |
| | | | | 告白する | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 訊く(聞く) | | 1 | 2 | | | | 3 | | 2 | | 8 |
| | | | | 訊ねる | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 質問する・をなす | | | | 1 | 2 | 1 | | | | | 4 |
| | | | | 取材する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 問題を出す | | | 1 | | | | 1 | | | | 2 |
| | | | | 相談する | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 相談を持ちかける | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 問う | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 意見を求める | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 伝える | | | 1 | 4 | | | | 3 | 1 | | 8 |
| | | | | 囁らす | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 示唆する | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | 諷刺する | | 2 | 4 | 6 | | | 2 | | | | 14 |
| | | | | 注意する | | 1 | | | | | | 1 | | | 2 |
| | | | | 呼び掛ける | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| | | | | 語る | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 指導する | | 1 | 1 | | | | | | | | 2 |
| | | | | 教える | | | 2 | 4 | | | | 1 | | | 7 |
| | | | | 伝授する | | | | 3 | | | | | | | 3 |
| | | | | 叫び込む | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 手取り足取りする | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 仕込む | | | | | 2 | | | | | | 2 |
| | | | | 提示する | | | | | | | 2 | | | | 2 |
| | | | | 紹介する | | 1 | 1 | | 1 | | | 1 | | | 4 |
| | | | | 披露する | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 許可する | | 2 | | | | | | | | | 2 |
| | | | | 求める | | 2 | | 4 | | | | | | | 6 |
| | | | | 譲す | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 任せる・任ず | | | | 1 | 1 | | | | | | 2 |
| | | | | 命令する | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 命じる・命ず | | 1 | 2 | 1 | | | | | | | 4 |
| | | | | 命令を出す | | | | 2 | | | | | | | 2 |
| | | | | 継命する | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 要求する・要求を行う | | | 1 | 2 | | | | | | | 3 |
| | | | | 頼む | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | 2 | 2 | | 8 |
| | | | | 依頼する | | | 1 | 2 | | | 1 | 1 | | | 5 |
| | | | | 指示する | | | 2 | | 1 | 1 | 1 | | | | 5 |
| | | | | 勧める | | 2 | | | 1 | | 2 | 1 | 1 | | 7 |
| | | | | 期待する | | | | | | | 1 | | | | 3 |
| | | | | 強要する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 無理強いする | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | | | | プッシュを行う | | | | | | | 1 | | | | 2 |
| | | | | プレッシャーを掛ける | | | 1 | | | | 1 | | | | 2 |
| | | | | 迫る | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 委嘱する | | | 2 | 1 | | | | | | | 3 |
| | | | | 要望する | | | 1 | | | | | | | | 2 |
| | | | | 要請する・要請を出す | | | | 1 | | | 1 | | | | 2 |
| | | | | 迫及する | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| | | | | 措置をとる | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 注目する | | | | 1 | | | | | | | 3 |
| 精神的働き掛け動詞 | ○/× | 相手への態度型 | ○ | 嫌疑をかかげる | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | | | | 計 | | 94 | 121 | 148 | 23 | 6 | 64 | 35 | 33 | | 524 |

On the Usage of Kara-passive Sentences

KUMAI, Hiroko

This paper examines the characteristics of verbs used in *kara* passive sentences through the analysis of the examples collected from a linguistic corpus, “Chunagon” and other sources. The results confirm that many verbs which used to be classified as not being able to occur in *kara*-passive are used in those sentences when the agent can be interpreted as a source of the motion, through a meaning involving causativity, energy, emotion, senses and so on. It is also found that, although whether *kara* can be used to indicate an agent depends on the meanings and characteristics of the verbs themselves to some extent, there is a tendency for *kara* to be preferred when a speaker or writer wants to emphasize the marked agent which is different from what is socially accepted or a source, direction, speed or strength of the act.